

大学連携によるドキュメンタリーの制作

——「ライチョウの未来」を映像発信——

枡 窪 優 二*

Inter-university Collaborative Documentary Production
—Creation and Release of “The Future of the Ptarmigan”—

Yuji TOCHIKUBO

はじめに

テレビ番組などの映像作品は、撮影機材・編集機材の性能向上や低価格化などを背景に、一般の教育機関や市民レベルでも容易に制作できる時代になった。こうしたなか椋山女学園大学文化情報学部枡窪研究室（枡窪優二教授：著者）と信州大学教育学部生態学研究室（中村浩志特任教授／名誉教授）は連携・協力して、北アルプス乗鞍岳に生息するライチョウをテーマにした映像ドキュメンタリーを2014年12月に制作・公開した。作品は長さ27分30秒、乗鞍岳に生息するライチョウの生態を1年にわたり映像取材し、生息数が減少するライチョウの現状や高山環境の変化を紹介した上で、ライチョウの保護、自然環境の大切さを訴える内容である。この作品は2015年度の科学技術映像祭と地方の時代・映像祭に出品した。こうした映像祭に参加するのはテレビ局や制作プロダクションの作品が多いが、専門の異なる2つの大学研究室が連携・協力して本格的なドキュメンタリー作品を制作し、映像祭に参加した事例は国内では珍しい。ドキュメンタリーは制作機材が容易に入手できても、映像で何をどのように伝えるのか、というジャーナリズムの本質に関わる難しさは今も昔も変わらない。そこで本稿では、作品の企画、取材・撮影、映像編集・仕上げなどの制作過程について報告した上で、専門領域が異なる2つの大学研究室がコラボレーションすることで、社会に求められるドキュメンタリーをどのように制作することができたのか、ということ进行分析・評価し、今後の大学における映像メディア領域の研究・教育の可能性やその方向性を考察した。

1. 作品の企画

映像作品は企画が制作の原点になる。今回のドキュメンタリーは、2013年夏にライチョ

* 文化情報学部 メディア情報学科

ウ保護の取り組みを新聞報道で知った著者（栃窪）が信州大学にコンタクトしたのがプロジェクトのスタートになった。椋山女学園大学栃窪研究室はこの年、ドキュメンタリー「アジアゾウの誕生」を名古屋市東山動植物園と共同で制作した後で、2014年に制作する次のテーマを探していた。できれば自然環境をテーマにした作品を制作したいと思っていた。

ドキュメンタリー制作は企画（作品テーマ）が最も重要になる。映像でメッセージを伝えることがドキュメンタリーの使命なので、「何をどう伝えるのか？」ということが企画段階で明確になっていることが求められる。そうした視点では、ライチョウが絶滅の危機に瀕していること、ライチョウの保護活動が進められていること、北アルプス乗鞍岳に生息するライチョウの生態を伝えた記録映像が少ないことから、作品のメッセージ性は極めて高く、優れた作品テーマだと言える。それを踏まえて次に検討することは、実際に現地で取材・撮影が可能か、という点である。標高3000メートル級の乗鞍岳でカメラ撮影をするのは体力的にも厳しい。その問題をクリアしたとしても、作品を制作するまで何日程度の撮影期間が必要なのか、そうした取材時間を確保できるのか、といった現実的な問題も多い。また2つの大学研究室がドキュメンタリー制作に向けてスムーズに連携・協力できるか、といった基本的な確認も必要になる。そうしたことを踏まえて、2013年8月に乗鞍岳で最初の顔合わせをした。

1回目の打合せ・取材は2013年8月下旬に実施した。昼平の乗鞍バスターミナルで、著者・栃窪と信州大・中村教授が合流し、その近くの大黒岳付近でライチョウ親子を撮影した。この日は強い雨が降る最悪の天気だったが、7月にふ化した雛4羽と母鳥の親子に出会い、雛が母鳥の羽のなかに入って寒さをしのぐ姿などを撮影した。そのあとライチョウ保護活動の拠点にしている東京大学宇宙線研究所乗鞍観測所の近くに移動して、今後の進め方を相談した。打合せでは下記内容を確認した。

【1回目の打合せ】

〈信州大の意向〉

- ・ライチョウ保護を訴えたいのでドキュメンタリー制作に協力できる
- ・現地で信州大が撮影した映像もあるので、それも活用できる
- ・カメラ撮影は信州大がライチョウ生息調査のときに撮影する形が良いかも知れない
- ・2013年秋から準備して、2014年に作品を制作するならば対応可能
- ・2013年夏に環境省の委託を受けて実施したライチョウ保護活動の撮影映像があり、その映像を研究発表用に映像編集してほしい

〈椋山女学園大の確認〉

- ・2014年にドキュメンタリーを制作する方向で引き続き打合せを進めたい
- ・ライチョウ保護活動の撮影映像を椋山大で研究発表用に映像編集することは可能
- ・その撮影映像を確認の上で、可能ならば2013年夏の「ライチョウ保護活動」を紹介する記録映像を共同制作したい
- ・これをベースに2014年に本格的なドキュメンタリー作品を制作したい
- ・次回は9月中旬に乗鞍岳で2回目の打合せ・取材を実施する

1回目の打合せでドキュメンタリー制作に向けて動き出したが、映像作品は制作期間が

長く、様々な条件をクリアした上で作品を完成させることになる。このため取材・撮影に着手しても、作品を完成できないケースも多い。したがって、とりあえず信州大が希望している研究発表用の映像編集を進めた上で、梶山大でそれを短編の映像作品として制作できるか、検討を進めた。そして9月中旬、乗鞍岳で2回目の打合せ・取材を実施した。この日は天気にも恵まれて、前回に大黒岳で撮影したライチョウ親子をしっかりと撮影することができた。またライチョウ保護・映像記録作品のためのインタビュー撮影や雑感撮影も実施した。また研究発表用映像の編集打合せも実施した。打合せで確認した内容は下記の通りであった。

【2回目の打合せ】

- ・ライチョウ保護活動の映像記録作品（長さ15分程度）を制作する
- ・梶山大が10～11月で編集、12月にナレーション、音楽、字幕を入れて完成させる
- ・ドキュメンタリー作品は2014年度に制作する方向で打合を継続する
- ・ライチョウの映像取材は信州大側が生態調査のときに撮影する
- ・ライチョウ以外の映像取材は梶山大が行う
- ・ライチョウ保護映像とドキュメンタリーの打合は梶山大スタジオで行う

こうした打合せでドキュメンタリー企画の方向性はまとまった。ドキュメンタリーは完成まで何回もの取材・撮影が必要になる。予定していた映像取材が何らかの事情で出来なければ作品は制作できなくなるなど、制作現場では様々なリスクを伴うが、とりあえずプロジェクトはスタートした。

2. 制作作業の分担

今回のプロジェクトでは下記の2つの作品を企画・制作した。

①映像記録「奇跡の鳥・ライチョウ～北アルプス乗鞍岳の保護活動～」

本編：16分15秒 2013年12月 完成・公開

②ドキュメンタリー「ライチョウの未来～北アルプス・乗鞍岳」

本編：27分30秒 2014年11月 完成・公開

※2015年6月にリメイク版（本編：26分00秒）を制作

映像作品の制作は、取材・撮影のほかに、構成案・台本の作成、映像編集、音楽の選曲、ナレーション、音声処理、字幕スーパー処理などの作業工程が必要になる。今回のプロジェクトは、2つの大学研究室の共同制作であるが、大きな担当区分としては梶山女学園大が映像制作を担当、信州大が現地取材・出演（解説／インタビュー）・監修を担当する形で進めた。信州大は中村浩志教授が担当したが、梶山大は著者（柝窪）がプロデューサー兼チーフディレクターを担当し、ゼミ学生がナレーターや音声の収録・編集などを担当した。映像記録「奇跡の鳥・ライチョウ～北アルプス乗鞍岳の保護活動～」(これ以降

は映像記録「ライチョウ保護」と記載）とドキュメンタリー「ライチョウの未来～北アルプス・乗鞍岳」とも作業分担は同じで、表1の通りである。○は「作業を担当」、△は「一部を担当」、×は「担当しない」を意味する

梶山女学園大は映像制作が専門の研究室なので、ゼミ学生（3年生）が卒業研究として参加した。学生の映像制作は取材・撮影から編集・仕上げまで一貫して担当するのが普通だか、今回は現地での撮影を信州大と梶山大・教員が担当したので、学生はナレーション収録・音声など部分的な参加になった。このため学生に対しては、通常の研究課題作品ではなく、番外編作品の制作として参加するように指導した。ただし別の見方をすると、ナレーションを担当した学生は、テレビ制作現場などと同じ、現場取材に行かないナレーターの立場で、レベルの高いナレーションを求められる形になった。音楽については、雄大な北アルプスの自然を描く作品なので、既製の著作権許諾音源（CD）だけで構成するのは難しいと判断して、名古屋在住の作曲家にオリジナル音楽の制作を依頼し、その音楽を中心に使用した。その作曲家は栃窪研究室の他作品シリーズの音楽も担当しているサポーターでもあり、ライチョウ作品の音楽をボランティアで制作してくれた。

表1 制作作業の分担

	梶山女学園大学栃窪研究室	信州大学生態学研究室
企画	○ 教員が担当	△
構成・台本の作成	○ 教員が担当	△ 修正・アドバイス
カメラ撮影	○ 教員が担当（雑感部分）	○ ライチョウ部分
出演	△ 学生がナビゲーター担当	○ インタビュー・解説
映像編集	○ 主に教員が担当	×
ナレーション	○ 学生が担当	×
音声の収録・編集・調整	○ 学生が担当	×
音楽の選曲	○ 主に教員が担当	×
字幕スーパー処理	○ 主に教員が担当	×
作品の監修	×	○
最終確認・仕上げ	○ 学生と教員が担当	○

映像作品の制作は上記のように様々な作業工程が必要になるが、全ての工程を大学スタジオで対応した。このため外部への委託費等は発生せず、制作費は現地取材や打合せに必要な旅費・交通費だけであった。



写真1 乗鞍岳のライチョウ



写真2 合同打合せ（梶山大スタジオ）

3. 映像記録「ライチョウの保護活動」の制作

映像記録「ライチョウの保護活動」は、2014年度の本格的なドキュメンタリー制作を成功させることを目的に、その事前準備という意味で取り組んだ。梶山大はライチョウの専門知識はなく、信州大は他大学と協力・連携した映像制作の経験はない。そこで事前の制作リハーサルを兼ねて作品を1本制作することが、双方の理解や信頼感を深めて、共同制作をスムーズに進められると考えたからである。

作業は8月に現地打合せをしたあと、信州大が撮影した映像を梶山大スタジオでプレビューすることから着手した。2013年夏のライチョウ保護活動は乗鞍岳の東大観測所近くに大きさの異なる3つのケージを設置して、雛が生まれて間もないライチョウ親子3組をケージのなかに誘導し、天敵に狙われたり、雨や寒さで衰弱するのを防ごうという世界初の試みである。信州大はそれを民生用HDカメラで撮影していた。撮影期間は2013年7月下旬～8月中旬で、ふ化4週間後にライチョウ親子を自然に戻すシーンまで記録していた。撮影者は中村教授で、あくまでも研究記録としてビデオ撮影したもので、映像作品の制作を前提にした撮影ではない。そこで梶山大で撮影映像を入念にプレビューし、必要な部分を編集することで、長さ10分～15分程度の映像記録を制作できるか検討した。その結果、保護活動の合間に撮影した映像ではあるものの、ライチョウ研究者の視点で必要なシーンを的確に撮影していたことを確認でき、使用可能な映像を上手く編集すれば、長さ15分程度の映像作品を制作できると判断した。それをもとに映像記録の構成を検討した。映像記録は、映像をつなぎ合わせるだけではなく、ナレーションを入れて、音楽を入れ、字幕スーパーを挿入して、映像コンテンツとして完全パッケージにする。このためライチョウの保護活動のほかに、乗鞍岳の説明、ライチョウの説明、保護活動に取り組む中村教授の紹介などが必要になる。また保護活動に取り組む中村教授の思いを伝えることも重要になり、中村教授のインタビューなども必要になる。そこで構成を検討した上で、必要な映像を9月中旬の2回目打合せ／取材時に撮影することにした。この撮影では中村教授のインタビューのほか、乗鞍岳の外観、オープニング用のイメージカットなども撮影した。そのあと映像を確認して、構成案を表2の通りに決めた。

この構成案に沿って、梶山大で映像を仮編集し、ナレーション台本を作成した。そのあとナレーション原稿を信州大で確認した上で、仮完成版の制作に入った。こうした映像作品は、従来はVTRテープで編集作業をして、音声スタジオでのMA処理を経て、完全



写真3 現地での撮影



写真4 ナレーション収録

表2 記録映像「ライチョウの保護活動」 構成案

ロール番号	内容	時間（予定）
R-1	オープニング	45秒
R-2	乗鞍岳・ライチョウの説明	2分30秒
R-3	ライチョウ保護活動の概要	2分00秒
R-4	8月4日・ふ化後3週間	1分30秒
R-5	ライチョウの生態	1分30秒
R-6	8月11日・ふ化後4週間	2分00秒
R-7	北アルプス・乗鞍の自然	1分45秒
R-8	8月14日 自然に戻す・放鳥	1分00秒
R-9	放鳥後の様子・中村先生の話	2分00秒
R-10	エンディング	1分00秒

パッケージの作品を作り上げていた。このため作品を仕上げたあとの修正・変更は難しく、編集段階で問題点を全てクリアするような制作手法をとっていた。しかし2005年ころから、コンピューターを使ったノンリニア編集が普及して、パソコンで作品の編集・仕上げを行うようになり、音声処理を含めた修正・変更は極めて容易になった。このため作品を仕上げる前に微妙な判断をするより、作品をある程度作り上げてから修正して完成させる方が、制作効率が良いことがわかってきた。そこで今回は、まず仮完成版を作って、それを修正・微調整する形で作品を仕上げた。仮完成版の制作にはゼミ学生2人の参加を求めた。1人は音声・編集を担当、もう1人はナレーターを担当した。台本に従って仮ナレーションを収録、それをノンリニア編集で音声編集する形で映像に挿入した上で、音楽をつける作業をした。こうした作業を経て11月に仮完成版が出来上がった。

このあと、この仮完成版をもとに、梶山大スタジオで合同の詳細打合せをした。打合せでは修正点を洗い出したが、作品全体の流れや構成に問題なく、最終台本をまとめ、映像編集や字幕スーパー等を修正した。そして12月上旬に本番ナレーションを収録して、映像記録「奇跡の鳥・ライチョウ～北アルプス乗鞍岳の保護活動～」は完成した。作品は梶山女学園大学 YouTube サイトで公開した¹⁾。構成案を微調整して、作品全体の長さは16分15秒となった。梶山女学園大学と信州大学が共同制作した初めての映像作品だったが、制作はスムーズに進み、当初の予想を上回る質の高い記録映像が完成できた。これを支え

に翌年の2014年度に、本格的なドキュメンタリーの制作をめざすことにした。

4. ドキュメンタリー「ライチョウの未来」の制作

ドキュメンタリー「ライチョウの未来」の制作は、2013年12月に映像記録が完成したあと、具体的に打合せを進めた。作品の内容や撮影期間、取材方法などについて相談して、下記の通り決めた。

【ドキュメンタリー制作の基本方針】

- ・乗鞍岳に生息するライチョウの1年を映像で伝える
- ・ライチョウ保護や自然環境の大切さを訴える
- ・作品の長さは30分程度を目標
- ・ライチョウの撮影は信州大が担当
- ・それ以外の撮影は梶山大が担当
- ・制作の流れは前回の映像記録と同じ
- ・信州大は撮影映像データを梶山大に送付する
- ・梶山大で撮影映像を確認して、構成を検討する
- ・作品は冬→春→夏→秋の流れで構成する
- ・2014年12月に作品を完成させる

こうした基本方針のもとでドキュメンタリー制作はスタートした。現地撮影は信州大がライチョウの生態調査時にカメラ撮影をする。したがって梶山大はとりえず信州大の撮影した映像を確認するだけで、2014年6月まではノンリニア編集のプロジェクトに撮影映像を取り込む作業だけを進めた。7月に入り撮影映像が集まってきたので、信州大の撮影した冬から春にかけての映像を詳細にプレビューして、ドキュメンタリーの基本構成を検討した。作品では北アルプス乗鞍岳の豊かな自然の紹介や中村教授のインタビューなど、ライチョウ以外の映像も必要になる。そこで著者（柗窪）が7月から9月にかけて計3回、現地取材を実施した。7月・8月の取材では畳平付近の高山植物を撮影、9月には中村教授のインタビューと秋の乗鞍岳の雑感を撮影した。そうした現地撮影と平行して8月下旬に作品全体の流れを検討して、ドキュメンタリーの構成案（表3）を決めた。



写真5 ドキュメンタリー・タイトル部分



写真6 ドキュメンタリー・解説部分

表3 ドキュメンタリー「ライチョウの未来」 構成案

ロール番号	内容	時間 (予定)
R-1	オープニング	1分10秒
R-2	日本のライチョウ	1分00秒
R-3	ライチョウ研究者・中村先生の紹介	40秒
R-4	ライチョウの生態・概要	1分00秒
R-5	乗鞍の冬・ライチョウ	1分15秒
R-6	冬のライチョウ (かけ合いで説明)	3分15秒
R-7	乗鞍の春・ライチョウ	1分15秒
R-8	春のライチョウ (かけ合いで説明)	3分15秒
R-9	6月のライチョウ	1分10秒
R-10	脅かされる高山の自然環境	1分50秒
R-11	7月・ライチョウの親子	1分45秒
R-12	乗鞍岳の夏・高山植物	3分30秒
R-13	ライチョウ保護活動 (2013年)	2分10秒
R-14	乗鞍の9月・秋へ	1分10秒
R-15	まとめ・中村先生のインタビュー	1分30秒
R-16	エンディング	1分00秒

この構成案をもとに8月下旬から映像の仮編集を開始した。編集はノンリニア編集・EDIUS Pro5のマルチシーケンス機能を使って、R-1～R-16までロールごとに編集を進めた。そして9月に椋山大で合同打合せをして、ナビゲーター（女子学生）と中村教授とのかけ合い部分を中心にコメントや使用映像を相談して、10月にナレーション台本第1稿をまとめた。そのあと11月に2回目の合同打合せを実施して、修正部分を最終確認した上で、椋山大スタジオでナビゲーターと中村教授とのかけ合い部分と制作作業シーンを撮影した。このドキュメンタリーの制作には、栃窪ゼミの学生（3年生）11人が参加した。作品全体をナレーター（AとB）＝2人と、ナビゲーター＝1人で進行するように構成して、その3人の担当シーンごとに、学生はナレーター（又はナビゲーター）、収録担当、ディレクター担当の3人でチームを組ませた。このほか2人の学生がCGを含めた作品全体の確認を担当した。こうした作品のナレーターは普通1人で担当するが、今回のプロジェクトは学生の教育の場として活用することも視野に入れているので、ナレーターは学生2人で担当するようにした。11月に仮編集を修正する形で本編集を完了させ、音楽・CGスーパーを挿入した上で、本番ナレーションを収録・音声編集して、ドキュメンタリー作品は12月に完成した。完成作品は表3・構成案の通りであるが、各ロールの尺は若干変更になり、全体の長さは27分30秒であった。作品は椋山女学園大学 YouTube サイト²⁾で公開した。

6. 考察・まとめ

完成作品は、2014年12月に岐阜大学で開催されたライチョウ展で上映展示されたほか、

2015年4月に東京で開催された科学技術映像祭に出品した。また梶山女学園大学ではメディア情報学科の映像教材としても活用した。作品の内容については、概ね好評であり、制作者（著者・杉窪）としては納得できるもので、当初の目標をクリアした作品だと評価できた。ただしその後の検証で、本編途中のナビゲーター（学生）と中村教授とのかけ合い部分（「冬の説明」と「春の説明」の2か所）の説明が少し長すぎて、作品全体のテンポが失われているような印象を受けた。そこで2015年6月にその2か所を部分的に再編集して、最終的に1分30秒短縮したリメイク版を制作した。それを2015年11月に大阪で開催された地方の時代・映像祭に出品した。



写真7 冬のライチョウ



写真8 春のライチョウ

本稿では大学連携によるライチョウをテーマにしたドキュメンタリー作品の制作・発信の試みについて報告した。ドキュメンタリーはニュースとは異なり、そのテーマについて時間をかけて、しっかりとメッセージを伝えることができる。今回の作品も長さ27分30秒（リメイク版は26分00秒）の映像を通して、北アルプス乗鞍岳の自然やそこに生息するライチョウの生態、脅かされる高山の自然環境、ライチョウ保護の取り組みなどを伝えることができた。社会的に求められる情報を2つの大学がドキュメンタリー作品でインターネット発信した意義は大きい。

こうした本格的なドキュメンタリーはテレビ局などで制作・放送されるのが一般的で、今回の取り組みは専門の異なる2つの大学の研究室が共同制作した点に大きな特徴がある。しかしながらテレビ局におけるドキュメンタリー制作でも、ライチョウのような自然科学系の専門性が高いテーマは、研究者の協力を仰いで制作することが必要になる。したがってライチョウ研究者（信州大）と映像制作研究室（梶山女学園大学）とのコラボレーションは、ある意味では最も効率的な制作態勢とも考えられる。映像制作を担当する大学の力が問われることにもなるが、ある意味では最強の制作メンバーとも言える。

映像制作を担当した梶山女学園大学は、社会に必要なメッセージを伝える社会貢献だけではなく、ドキュメンタリー制作を学生の教育の場に活用して、質の高い映像メディア教育を学生に実践したいという狙いもあった。この点については、テレビ局レベルのドキュメンタリー制作に学生が積極的に参加して、質の高い作品を完成できたことから、その成果は大きかったと受け止めている。ドキュメンタリーのナレーターやナビゲーターは、テレビ局では初心者は担当できない仕事である。それを学生が教員の指導を受けながら担当して、一定の評価が得られる役割を担ったことは、地元のメディア関係者の間でも高く評価されている。こうした本格的な映像制作が大学で出来るのは、技術の進歩でカメラやコ

ンピューター・ノンリニア編集などの高性能の制作機材が低価格で入手できる時代になったことが背景にある。また制作した作品をテレビで放送できなくとも、インターネットで動画公開することで、日本全国はもとより世界に、映像を自由に発信できる時代になったことも、こうしたプロジェクトを支えている。日本でテレビ放送が開始されてから62年が経過するが、こうした大学連携によるドキュメンタリーの制作・発信は、いま注目されているメディア情報の新しい発信形態とも言える。

ドキュメンタリーは、テレビ局が制作しても、映像制作会社が作っても、大学や市民が制作しても、視聴者には関係ない。映像で何をどのように伝えるのか、制作者のメッセージが大切になる。そうした意味では今回の大学連携によるドキュメンタリー「ライチョウの未来」の制作は、新しい時代のメディア情報発信の可能性や社会的な役割、映像メディア教育のあり方を探る実践的なモデルケースになる。今回の大学連携プロジェクトでは、ドキュメンタリー制作を的確に指導できる経験豊かな教員と、作品テーマを専門にする研究者がいたことがプロジェクトの成功につながった。また限られた時間や予算で効率的に取材・制作できるように制作工程を工夫し、大学・研究室間の信頼関係を築くことの大切さも浮き彫りにした。情報メディアが多様化するなかで、テレビ局ではない教育機関・大学が専門性を生かして、社会に必要なメッセージを発信することは映像ジャーナリズムの視点でも極めて重要な課題でもある。大学を軸にした地域連携による映像メディア発信の役割と可能性について、今回の事例を支えに今後も実践研究に取り組みたい。

この研究は平成26年度椋山女学園研究助成(B)による研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 映像記録「奇跡の鳥・ライチョウ～北アルプス乗鞍岳の保護活動」椋山女学園大学 YouTube サイト <http://youtu.be/TIs0iDB5fTs>
- 2) 映像ドキュメンタリー「ライチョウの未来～北アルプス・乗鞍岳」椋山女学園大学 YouTube サイト <http://youtu.be/Blh3Wp9zXxA>